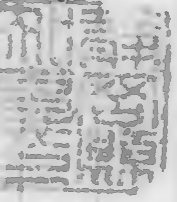


2465

内務省
第六十九號

大正七年九月三十日

静岡縣知事赤池

濃


内務大臣床次竹二郎殿

贈位ノ義ニ付内申

故小島 蕉園

故平野 三郎右衛門

故友野 典右衛門

外三名

故萩原 正平

故井伊 高顯

故狩野 貞長

右之者別紙事蹟取調書之通夫々功績顯著ノ者ニ付相當贈位ノ御詮議相成候様致度此段内申候也

故 小島 源



右源一田安徳川氏ノ舊臣ニシテ文化中
 清廉ノ名ヲ得テ代官ノ屬吏ト為リ甲州ニ
 赴キ道德ヲ講シテ善行ヲ彰シ學校ヲ設ケ
 テ産業ヲ奨勵ス汙弊ヲ除キテ德澤一鄉
 ニ溢ル又遠州ニ一橋徳川領ノ代官トシテ赴
 任スルヤ頑民ノ陋習ヲ改メ農民事ヲ勵マシ
 テ善政ヲ施ク猶ホ逸事美談ノ記スヘ
 キモノ多シト云フ仍テ從五位ヲ贈ラレ
 味ト入キカ

内 關

故小島蕉園事蹟誦書

小島蕉園事蹟調書

一 畧 歴

蕉園名ハ彙、字ハ公倫通稱源一、藤原姓、蕉園ハ雅號ナリ明和八年江戸ニ生ル資性清廉ニシテ喜ヒテ書ヲ讀ミ文ヲ屬ス父ハ田安家附旗本ニシテ當時戯作家トシテ著明ナリシ唐衣橋州其ノ人ナリ寛政元年二月回家ノ部屋住トナリテ士片岡孫兵衛組ノ勘定見習ヲ仕官ノ始メトシ同家ノ右筆見習、右筆、右筆上座ニ歴任ス同十二年二月昌平坂學問所ニテ經史文章ノ試験ヲ受ケ其ノ四月學問出精ノ賞トシテ白銀七枚ヲ賜ル文化二年七月右筆上座ノ特筆ヲ代官ノ屬吏ニ昇一進ニテ甲州ニ赴任セリ

一 甲州ニ於ケル蕉園

甲州ノ俗頑悍ニシテ治メ難シト稱スト虽モ為政者其ノ人ヲ得ザルナリ蕉園前数代ノ代官及屬吏ノ治政ノ痕跡ヲ顧思スルニ苛酷ナル年貢ノ取上ケヲ為シテ私腹ヲ肥シ人民ノ妻娘ヲ官ノ威ヲ以テ玩弄セリトノ評類ナリ人民ノ輿望全ク地ヲ拂ヒ曲事畏憚トセス醜態見ルニ怵ヒサルモ至ル蕉園靜カニ考察スルニコノ地必スシモ難治ニアラサルヲ覺知シ献身人民ノ福利ニ努力セシメトテ契ヒタリ蕉園府ニ入ルヤ人民ノ驕慢人ヲ凌クノ風アルヲ慨シ直ニ名主長百姓ヲ集メテ孝経ノ講義ヲナシ其ノ他孝婦ノ表彰學校ヲ建設シ産業ヲ勸奨セリ、精ヲ勵シテ治ヲ講シ首トシテ民利病ヲ問フ其ノ間僅ニ三年ニシテ徳化惠政部内ニ汪溢シ惡風茲ニ掃蕩セラレ父老皆稱シテ曰ク「向キニ吏タリシ者ハ民ヲ治ムルニアラスシテ徒ニ之ヲ擾シタリ今ヤ蕉園ハ怨ラス民ノ樂享ヨリ大ナルナシト蕉園已ニシテ儕輩ノ嫉ニ會ヒ自ラ劾シテ江戸ニ還ル

一 江戸ニ於ケル蕉園

静岡縣
小島藩

小島蕉園事蹟調書

一 畧 歴

蕉園名ハ桑、字ハ公倫通稱源一、藤原姓、蕉園ハ雅號ナリ明和八年江戸ニ生ル資性清廉ニシテ喜ヒテ書ヲ讀ミ文ヲ屬ス父ハ田安家附旗本ニシテ當時戯作家トシテ著明ナリシ唐衣橋州其人ナリ寛政元年二月回家ノ部屋位トナリテ士片岡孫兵衛組ノ勘定見習ヲ仕官ノ始メトシ同家ノ右筆見習、右筆、右筆上座ニ歴任ス同十二年二月昌平坂學問所ニテ經史文章ノ試験ヲ受ケ其ノ四月學問出精ノ賞トシテ白銀七枚ヲ賜ル文化二年七月右筆上座ノ特筆ヲ以テ代官ノ屬吏ニ昇進シテ甲州ニ赴任セリ

一 甲州ニ於ケル蕉園

甲州ノ俗頑悍ニシテ治メ難シト稱スト虽モ為政者其ノ人ヲ得ザルナリ蕉園前数代ノ代官及屬吏ノ治政ノ痕跡ヲ顧思スルニ苛酷ナル年貢ノ取上ケヲ為シテ私腹ヲ肥シ人民ノ妻娘ヲ官ノ威ヲ以テ玩弄セルトノ評頻ナリ人民ノ輿望全ク地ヲ拂ヒ曲事畏憚トセス醜態見ルニ怵ヒサルモアルニ至ル蕉園靜カニ考察スルニコノ地必スシモ難治ニアラサルヲ覺知シ献身人民ノ福利ニ努カセシメトテ契ヒタリ蕉園府ニ入ルヤ人民ノ驕慢人ヲ凌クノ風アルヲ慨シ直ニ名主長百姓ヲ集メテ孝經ノ講義ヲナシ其ノ他孝婦ノ表彰學校ヲ建設シ産業ヲ勸奨セリ、精ヲ勵シテ治ヲ講シ首トシテ民利病ヲ問フ其ノ間僅ニ三年ニシテ徳化惠政部内ニ汪溢シ惡風茲ニ掃蕩セラレ父老皆稱シテ曰ク「向キニ吏タリシ者ハ民ヲ治ムルニアラスシテ徒ニ之ヲ擾シタリ今ヤ蕉園ハ怨ラス民ノ樂享ヨリ大ナルナシト蕉園已ニシテ儕輩ノ嫉ニ會ヒ自ラ劾シテ江戸ニ還ル

一 江戸ニ於ケル蕉園

小島蕉園

蕉園江戸ニ遷リテ磯野弘道ニ従ヒ醫ヲ學ブ後本郷竹町ニ僑
居ス陋居狹窄僅ニ風雨ヲ蔽フノミ治ラズ者アルハ青囊ヲ
肘ニシテ往キ藥資ノミ取ツテ去ル蕉園不幸ニシテ妻ヲ喪ヒ母
ニ事フルト至孝甲民蕉園が妻ヲ失ヘルヲ聞キ相告ケテ曰
「吾儕ノ今日アルハ蕉園ノ惠多キニ由ル彼レ妻ヲ喪ヒテ且ツ貧シ
ト報セサルヘカラス」トテ各々醵金シテ百金ヲ得蕉園ト知面者
三人衆ニ代リテ齎ラシ蕉園ノ居ヲ訪フ時蕉園在ラス母出テ、
之ニ應ス三人地ニ伏シ情ヲ具シテ金ヲ出シ之ヲ呈ス母曰ク「厚
意謝スルニ言ナレ但タ我子捐介ニシテ人ノ惠ヲ受フルヲ欲セス然
レトモ適ニ不在五口レ將ニ之ヲ藏シ還ルヲ俟ケテ其厚誼ヲ語レ
トス請フ明日復タ来レ」ト皆拜シテ去ル臆テ蕉園還ルニ及ヒ
母具ニ狀ヲ告グ蕉園嗟嘆シテ曰ク「方今情義ノ薄キニト
紙ノ如ク士大夫ト雖モ徳ヲ知ル者希ナリ況ニヤ頑悍化シ

難キ甲州ノ農民ニ於テラヤ然ルニ往年ノ恩惠ヲ報ユルニ此ノ如キ
ヲ以テス亦少シク母ノ心ヲ慰ムルニ足ラン然レトモ何ゾ此百金ヲ受ク
ヘケンヤ」ト母曰ク「吾レ固ヨリ其然ルヲ知ルト雖モ直ニ之ヲ卻ケハ恐ク
ハ其厚意ヲ傷ケレ且專断ハ吾ガ道ニアラス権リニ收メテ以テ汝ニ示
ス」蕉園大ニ喜ヒ曰ク「之ヲ以テ彼等ニ飲食セシメ且勞スルニ人
事ヲ以テセン如何」ト母曰ク「善シト翌日蕉園自ラ往テ團扇
ト酒肴トヲ購ヒ母料理シテ以テ待ツ甲民至リ恩ヲ謝ス蕉園
之下座ニ緩々冠籍シ共ニ往事ヲ談シ之ヲ飲マシメ之ヲ食セシメ
且貽ルニ團扇ヲ以テス其情頗ル懇篤ナリ民感極リテ涙下ル
既ニシテ前ノ金ヲ出シ之ヲ卻ケテ曰ク「汝等故恩ヲ忘レス暑ヲ冒
シテ來訪シ且金ヲ醵シテ吾カ貧ヲ賑ハス厚誼何如ゾヤ然リト虽
モ嚮ニ施行セシ所ハ皆公事ニシテ私惠ニアラス民ニ私報ノ儀ナク吾
ニ於テモ私受ノ理ナシ余賣藥生ト為リテ家ヲ營ミ母モ亦

之ニ安シズ請フ念ト為ス忽レ歸ルノ日善ク我が為メニ謝セヨト皆愕然タリ及復之ヲ勸メ涙ヲ垂レテ言フモ亦涙ヲ收メラ之ヲ拒ム相争フ事ト久ウシテ終ニ受ケス甲民咨嗟低回暫クニシテ去ル還ルニ及ヒ具ニ其狀ヲ語ルニ甲民皆感激シテ相泣キ其金ヲ以テ生祠ヲ建テ之ヲ祀レリ

一 遠州ニ於ケル蕉園

寛政六年一橋家ハ齋禮侯ノ代ニシテ先祖ノ賄料ニ充テラレシ十萬石ノ内三万四千六百石余ヲ甲州ニテ賜分シ地ト榑原城東西郡ノ内三万六千二百石余ト引替ニナリシカハ代官所ヲ榑原郡波津村ニ置カレタリ爾來二十七八年間七人ノ代官交替ヲ見ルト雖モ未タ治ルル慶ヲ為サス為メニ人民其ノ堵ニ安ニスルヲ得ス徒ニ猜疑ノ心ヲ以テ服ス故ニ部内ノ統一ヲ缺キ年貢ノ滞納ニ馴レ小事ト虽モ願出ヲ事トセス悪風全部内ニ漲ル一橋家憂慮措ク能ハズ種ニ熟議ノ結果文政六年蕉園選マレテ一橋領ノ代官ニ任セラル時ニ齡五十三、甲州ノ人民傳ヘ聞キテ羨望セリト云フ、蕉園就任スルヤ各村ノ役人ヲ集メテ一同農業ニ精勵シ生計ヲ立直シ民風ヲ改善矯正シテ上下心ヲ一ニシテ意志ノ疏通ヲ計ルハキヲ申渡シタリ

其ノ後部内ニ領地ノ大變動ニ遭遇スルモ常ニ民心ノ歸趨ニ從ヒテ劃策シ其ノ局ニ處スルニ慈仁ヲ以テセリ人民感泣シテ皆其ノ德ヲ崇敬セリ、蕉園民ヲ治ルル才ニ長スト虽モ克ク民意ヲ察シ恰モ膝下ニ撫スル愛見ノ如ク足ラサルハ之ヲ教ヘ善行ハ之ヲ表彰シテ賞罰ヲ明ニセリ蕉園亦深ク心ヲ租法ニ用ヒ熟慮租法ヲ改正シテ弊風ヲ防止シ農民亦横虐ノ禍ニ遭フコトナク煩多ナル手數ヲ除者シテ安ニシテ農事ニ精勵シ一層租法ノ重キヲ感セシム蕉園竊カニ遠州年貢米ノ粗味ナルヲ知り代官ニ赴任

スルヤ自ラ各方面ニ出張シテ取調ヲ為シ其ノ原因ヲ知り直ニ品
種ノ採良耕作培養ノ方法ヲ啓發指導セリ其ノ他牛馬賣買
ノ便利ヲ圖リテ金融運用ノ便ヲ設ケタリ尚代官所ノ執務時
間ノ改正ヲ為ス等終始一貫人民ノ福利ヲ増進ニ意ヲ用サ
ルヲナク部内人民和氣蕩蕩トシテ業務ニ精勵ニ蕉園ヲ尊
敬スルヲ神ノ如シ

蕉園幼少ヨリ官途ニ就キ其ノ治ムル所善政ナラサルハナシ
一度官ヲ辞スルヤ醫ヲ學ビテ救濟事業ニ従フ蕉園亦
清廉潔白ニシテ曾テ民ヲレテ感泣セシメシ逸話ハ小學修身
教科書ニ掲載セラレテ國民道德ノ範ヲ示セリ

尋常小學校修身書

卷五

第二十四課

廉 潔

小島蕉園或時役人となりて甲斐におもむきたり。甲斐の風俗は荒荒しくて治め難しとの評ありしが蕉園ひたすら人民の為をばかりて治めしかば人民いづれも蕉園によるにび服せり

数年の後蕉園其の職をやめて江戸に歸れり。これより殿國を學びて之を業とせしが家貧しくして居る所僅かに風日をおほふに過かやりにしかば母に事へてひとへに孝養を盡せり。甲斐の人人蕉園の貧しく暮せるを聞き相けかりて百兩の金を集め之を贈らんとて總代三人江戸に來り蕉園の家を訪ひしにたまたま留守なりしかば其の金を蕉園の母に託して旅宿に歸れり。

明日三人の者再び行きて訪ひしに蕉園は酒食を用意して厚くもてなしやてかの金を出して「厚意謝するに言葉なし。これとヤキに我のなせし所は官命によりたるものなれば私に其の報を受くべきいはれなし。且我には定まれる業あり貧しけれども飢ゝるに至らず幸に深くこれふることなかれ」と云ひて返したり。三人は言葉を盡して勧めたれども蕉園かたき辭して受けおれはせんかたなくして立歸れり。かくて村民に其の由を告ゆしにいづれも益々其の廉潔なる志に感じ其の金にて蕉園の爲に社を立て死後も永く之を祀りたり。

格言 不義富貴ハ浮雲ノ如シ

部省登りニ係ル小
蕉園傳進テ送付
おけ

尋常小學校修身書

卷五

第二十四課

廉潔

小島蕉園或時役人となりて甲斐におもむきたり。甲斐の風俗は荒荒しくて治め難しとの評ありしが蕉園ひたすら人民の爲をばかりて治めしかば人民いづれも蕉園によるにび服せり。數年の後蕉園其の職をやめて江戸に歸れり。これより殿圖を學びて之を業とせしか家貧しくして居る所僅かに風日をおほふに過やかりしかど母に事へてひとへに孝養を盡せり。甲斐の人人蕉園の貧しく暮せるよしを聞き相ばかりて百兩の金を集め之を贈らんとて總代三人江戸に來り蕉園の家を訪ひしにたまたま留守なりしかば其の金を蕉園の母に託して旅宿に歸れり。

明日三人の者再び行きて訪ひしに蕉園は酒食を用意して厚くもてなしやてかの金を出して「厚意謝するに言葉なし。されどヤキに我のなせし所は官命によりたるものなれば私に其の報を受くべきいはれなし。且我には定まれる業あり貧しけれども飢ゝるに至らず幸に深くいれふることなかれ」と云ひて返したり。三人は言葉を盡して勧めたれども蕉園かたかく辭して受けいれはせんかたなくして立歸れり。かくて村民に其の由を告げしにいづれも益々其の廉潔なる志に感し其の金にて蕉園の爲に社を立て死後も永く之を祀りたり。

格言 不義、富貴ハ浮雲ノ如シ

11
用